

「キリストを得るために」

詩篇
ピリピ人への手紙

第42篇1節～4節
第3章1節～16節

説教 岡村 恒牧師

私は既にキリスト・イエスによって捕えられた存在だ。死刑判決が下れば直に命が奪われ得る状況のパウロですが、困難な中に在るピリピの教会の人達を思い出しながら喜んでいきます。

「あの犬どもを警戒しなさい。」(2節)ユダヤ人にとって犬はけがれた動物の代表でありました。神から信仰者を引き離そうとする誤った教えを警戒するようにと注意しています。

私たちはやがて終わりの日に自分と神との関係を証言しなければなりません。『キリストの使徒、復活の証人』全てのキリスト者がそう呼ばれます。日常の様々な場面で、主イエスが私の為に死んでくださったこと、死人の中から引き上げられて今も生きておられること、やがて再び来てくださることを証言しながら生きていきます。

かつてパウロはユダヤ人として何一つ欠けない者でした。ダマスコの町まで出かけてキリスト教徒を捕えようとしていました。その途上で、よみがえられた主イエスがお出会いになりました。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」(使徒行伝9章4節)そう語りかけられる主イエスによってサウロ(当時の彼の名前)は完全に方向転換させられます。それまで自分にとってかけがえのないと思っていた一切が、ふん土のような物に変わってしまいます。キリスト教徒迫害者が、福音を述べ伝える伝道者になりました。あなたたちも主イエスを信じるようになったあの時、人生の方向転換を味わったではないか。だから私と同じようにあなたも喜んで歩んでよいのだとパウロは語りかけます。

「律法による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基く神からの義を受けて、キリストのうちに自分を見いだすようになるためである。」(9節)これが《信仰義認》と言われる福音主義教会の最も大事な教理であります。

「義人はいない、ひとりもない。」(ローマ人への手紙3章10節)と聖書は断言します。聖霊を注がれた時、初めて主イエスによる救いを信じることができるようになりました。神が私たちをご覧になって、あなたは私の愛する子、そう宣言してくださいます。それが信仰による義であります。洗礼を受けて生き始めた者を、神は聖なるものに変えて下さる。教会ではそれを《聖化》また、《栄化》と記します。

「すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして、死人のうちからの復活に達したいのである。」(10節～11節)聖餐の食卓でパンと杯を受ける時、私たちは繰り返しキリストの復活の力を知り、聖化の体験を重ねることになります。

自分を造り変え、もっと神に喜ばれたいと願うのは当然であり、私たちはそう励みます。しかしその志を与え、実現に至らせてくださるのは神なのです。やがて終わりの日、約束通りキリストが用意してくださった住まいに入れて、主と共におらせてくださいます。復活の主イエスが働いておられるので、私たちは完成を目指して進められています。オリンピック競技でゴールを目指して走っている人の様に、もう後ろを振り返り、止まる必要などありません。主イエスの再臨の日、永遠の命を謳歌し、神を讃美する姿が見えるからです。ゴールに到達した勝利者に与えられる栄冠が私たちを待っています。

地上では患難、痛み、苦しみがあっても、確かに帰るべき故郷を示され、このことを信じ、終わりの時を待ち望んで歩むことが信仰者には許されています。なんと幸いなことでしょうか。聖書は、神を信じ、主イエスを信じる者には、はっきりした道筋が与えられていることを明瞭に示します。「わたしは道であり、真理であり、命である。」(ヨハネによる福音書14章6節)主イエスを信じて生きる時、一心不乱に神を目指して進むことができるとお示しになりました。

聖霊なる神が私たちに激しく臨んでいます。悲しみや痛みを繰り返し経験してもなお、それらを凌駕して余りある祝福が約束されています。時折迷い、立ち止まりそうになっても、聖霊なる神は必ず私たちを本来の道へと連れ戻し、信仰の旅を支えてくださいます。主を信じて歩む者の道に絶望が待ち受けることはありません。私たちが受ける栄冠、恵み、祝福の絶大さの故に、ただひたすら神が与えてくださった良い物だけを給うようになります。その日を心待ちにしながら、共に主を讃美し、主の食卓を囲みながら喜んで歩みましょう。

(記 説教要約奉仕者)